愛知教育大学教育創造開発機構紀要　vol. 3　pp. 87 ～ 96, March, 2013

表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした授業実践−2[1)]
―音楽構成要素を知覚・分析させ表現へ結びつけさせた試み―

新山王 政和*　加藤 幸子**　吉松 頼美**
太田 理恵***　石川 翼****　井垣 智恵****

*音楽教育講座
**附属名古屋小学校
***附属岡崎小学校
****附属名古屋中学校

A Report on Teaching Practice 2: Developing Students' Ability to Listen to Sounds and Music by Integrating Expression and Appreciation
—An Attempt to Improve their Musical Expression by Perceiving and Analyzing Musical Elements—

Masakazu SHINZANO*, Sachiko KATO**, Tanomo YOSHIMATSU**, Rie OTA***, Tsubasa ISHIKAWA**** and Chie IGAKI****

**Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*
***Nagoya Primary School Affiliated to Aichi University of Education, Nagoya 461-0047, Japan*
****Okazaki Primary School Affiliated to Aichi University of Education, Okazaki 444-0072, Japan*
*****Nagoya Junior High School Affiliated to Aichi University of Education, Nagoya 461-0047, Japan*

要　　約

小中学校の音楽科授業は歌唱や合唱等の表現活動が多くを占めている。しかし、他者や自己の演奏上の違いを聴き取れるからこそ演奏表現がより幅広く豊かになり、表現の技術や知識の裏付けがあるからこそ演奏上の変化を聴き取ることができる。現代社会において希薄になった「聴く」ことをコアに据え、表現と鑑賞が一体化した活動によって、音の塊や音の羅列に音楽的意味や価値を自分なりに付加しながら感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを思考判断し、それを言語活動によって共有・共通理解へ高める授業を本学附属小中学校と模索している。これまでの鑑賞活動はCD等によるプロ音楽家の演奏を聴取させて感想等を作文させていたが、本報告では学習指導要領が求める音や音楽を形づくる要素へ注目させ、感じ取って聴き取らせたものを意識化させ子ども達自身の演奏へと結び付けたり、自分達の演奏やプロ演奏家の模範演奏と比較することで気づいた演奏上の工夫を自分自身の演奏へ取り入れて活かしたりするような、鑑賞活動と表現活動を一体化した活動を志向している。本報告では、次の２点を共有共通理解として実践協力者に取り組んで頂いた。①音を出すことだけが表現活動ではなく、それ以前の楽譜と向き合う段階から既に表現活動は始まっており、音符の動きから音の動きを想像し、頭の中で響かせた音から音楽表現の変化を感じ取ることも表現活動の一部である。②出した音を聴く行為、頭の中で音を響かせながら楽譜を読み解く行為の全てが鑑賞活動と結び付いている。

キーワード：音や音楽を聴き取る力、表現と鑑賞の一体化、音楽科授業

はじめに

本報告は、科学研究費補助金(基盤研究(C)23531248)を受けて2011年度から2013年度までの予定で取り組んでいる研究について、小学校教員および中学校教員へ実践協力を依頼した折に説明した研究概要を整理した後、それを受けて本学附属学校で行われた研究授業と自主実践の概要を整理したものである。前回の報告では本学附属岡崎中学校で行われた研究授業と自主実践の概要を紹介しているが（新山王、矢崎2013)、それに続く本報告では附属名古屋小学校、附属名古屋中学校、附属岡崎小学校で行われた研究授業と自主実践の概要を紹介している。

1　研究の動機

小中学校の音楽科授業では表現活動が大部分を占め、極めてバランスを欠く状況にある。しかし「演奏とは聴き合わせることである」と言われるとおり、音を出すことと聴くこととは可逆的かつ不可分なものである。また他者や自己の演奏上の違いを聴き取れるから演奏表現が幅広く豊かになり、表現の技術や知識があるからこそ演奏上の変化を聴き取ることができる。この考え方に立脚し、愛知教育大学附属小中学校と連携しながら、「聴くこと」をコアとして表現と鑑賞を一体化させた活動によって音の塊や音の羅列へ自分なりに音楽的意味や価値を付加しながら感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを思考判断し、それを言語活動によって他者との共有化・共通理解化した上で再び表現活動や鑑賞活動へ還元する、鑑賞と演奏を相互作用的に結び付けた授業プランを模索している。科研費研究の初年度は言語活動をコアとして表現と鑑賞の一体化を視点とする実践を試行して頂き、筆者が客観的な立場から分析することでその資料性を高め、集約化を図った。そこで明らかにされた事項を次の2点にまとめておく。

①狙いを絞った教師からの働き掛けが無いと、音を塊として聞いてしまったり単なる音の連なりや重なりとして聞いてしまったりしてしまい、音や音楽を分析的に知覚することができないものと判断される。

②音の融合から生じる情動とキャラクターの違いを関連付ける活動を長く継続する必要があると判断される。

2. 科研費研究で提案している筆者の研究視点

2.1　授業で音楽の諸要素を扱うことの是非

音や音楽を形づくる要素や仕組みは、表現活動のみならず鑑賞の際も同じように作用している。事実、筆者が中学校の先生方と先行的に取り組んだ実践では、「まず自分なりに感じ取ったり聴き取ったりしたことをグループ内で話し合い、それを互いに確認し合い疑問を投げ掛け合うことで熟成化させ、全体の前で発表する活動によってより確かな意見にまとめる。このような活動を通して生徒は楽曲分析の力や聴取力を身に付けるプロセスを体験し、それを他者へ伝える表現力や文章力にも繋がっていったものと考える」という方向で集約された。[2] この結果より筆者は、全ての音楽活動を貫く基盤は「知覚し、聴き取り聴き分けること」だと考える。さらに表現と鑑賞を一体化させ「演奏しながら○○を聴く。演奏しているつもりで○○の変化や○○な工夫を聴き取る」のように、音や音楽を形づくる諸要素を触媒として演奏と鑑賞を融合した活動を探るべきだと考えている。現実に、周りを聴きながら他者に合わせて演奏することが苦手な演奏者は少なくない。

2.2　音や音楽を捉えるために不可欠な活動

表面的には幼稚に見られてしまう単純な「遊び」、例えばコップや茶碗を叩いて遊ぶ、一緒に歩く、音楽に合わせて踊るなどの活動は、実はその後の音楽的成長を導く重要な「音楽能力の芽」に直結する大切な「原体験」である。コップや茶碗を叩いて遊ぶことは、微妙な音色の違いや強弱の変化などに気づく知覚力を身に付けることに繋がり、音や音楽に合わせる活動では、テンポやリズムの変化などに気づき、これを捉えて体の動きをコントロールする力の基盤となる。事実、運動会で入場行進をしなくなった時期に、音や音楽からテンポを聴き取り、それに合わせて体を動かすことの苦手な子どもが増えたと言われている。単純な活動にもそれぞれ意味があり、それを正しく理解し説得力を持って周囲へアピールできるのは音楽を専門とする教師だけであろう。体育科の場合に、いきなり試合をやるのではなく、お手玉やたまつき、鬼ごっこなどの「遊び」から始まってそれをランニングやキャッチボールへ繋ぐことで基本的な体の動かし方や使い方を身に付けさせ、基礎的な運動能力の習得へ結び付けるのと同じである。

2.3　音楽における原体験の充実

「いい言葉、いい言い回し」とは、何も無いところから湧き出たり閃いたりするものではなく、過去に見聞きした言葉を思い出すことである。子どもの頃に触れた言葉が少ないと語彙も少なくなり、表現の幅も狭くなるのと同様に、音楽も原体験として一つでも多くの曲へ浸らせ様々なジャンルの曲に触れさせておく必要がある。そこから曲の好き嫌いや演奏表現の好みや嗜好の選択肢が広がり、音楽活動の素材（素や材料）となる「音楽のたくわえ」となり、曲に向き合うときの価値判断の基準である「音楽の定規」にもなる。つま

り心の中に音楽の「素材」や「たくわえ」、「定規」を多く持っていると、それらを拠り所として比べたり、すり合わせたりしながら曲を聴く「聴き方」を身に付けることへ繋がり、この「聴き方」をたくさん持っていれば鑑賞活動に対する抵抗も少なくなる。子ども達がアニメの曲や歌謡曲に対して自分自身の持つ「音楽の定規」と「聴き方」に拠って飽きずに鑑賞し、曲に対する好き嫌いを分かち合い、語り合うことを楽しんでいるのは、正に曲に対するスキーマ（シェマ）が確立している証であろう。

2.4　音楽表現や鑑賞の基盤となる音楽の定規

音楽を通じて学ぶべきものは、より多くの人々が聴いて心地よいと感じる「音楽表現上の制約を使いこなすための技（わざ）や術（すべ）、知識」である。守らないといけないルールや制約があるからこそ、そこから外れる自由を理解することができる。音楽表現のやり方やパターン、ルール（枠組）などを何も知らないまま自由を求めさせるのは、スポーツでやり方やルールを教えず「自分達で好き勝手に楽しめ」と言っているのに等しく、真の意味での楽しさやより深い楽しさの追求には繋がらない。つまり個人でフリーハンドに勝手気ままをやっていても、より多くの人々で何かを成し遂げる達成感や成就感、それに伴う楽しさや喜びへ繋がることはあり得ない。最大公約数的・最小公倍数的に、より多くの人々の間で共通するルールや制約を使いこなしながら色々な演奏を工夫し様々な表現を試してみることによって、新たに自分の表現方法や仕方を創り出し、それを他者から評価されたり認められたりすることに、音楽表現の真の楽しさはある。洋の東西を問わず「型に入り、型より出ずる」という諺があるとおり、その「やり方、パターン、ルール」に触れさせ、体験させて体へ染み込ませておくことが「原体験」の重要な役目であろう。

2.5 「音楽の定規」を基にして音楽の感動体験を共有する言語活動

文科省学習指導要領に「言語活動＝コミュニケーション力」と示されているとおり、音楽科における言語活動とはＣＤを聴きながら作文をしたり国語力を高めたりすることではなく、音や音楽の変化から聴き取った感覚や感情、情緒などを自分の言葉に置き換えて他者へ説明し、語り合ったり、すり合わせてみたり、議論したり説得したりする活動である。前節で述べた「音楽の定規」とは、曲を聴く場面で「この曲あれに似てる」や「これよりあの曲の方がリズムは面白い」、「あの曲のメロディックな雰囲気へ、この曲のリズミックなとこを足したような感じ」のように音楽の嗜好を判断する規準であったり、「あの人の歌い方よりもこの人の歌い方の方が好き」などのように音楽表現について価値判断し、それを語る時の比較対象としての目安や基準になったりするものである。現実に多くの児童・生徒が自分の好みの歌手やグループについて熱く語り合う姿を目の当たりにすると、彼らの中で「音楽を語る力」は十分に備わっており、それを音楽の授業の中へ取り込み、例えば多様な音楽を聴く時の「音楽の定規」を紹介して「聴き方のポイント」を理解させ、自分の目線で聴く力を持たせて感じ取る力を育むことの重要性を認識させられる。

このように多様な音楽に対して自分の「価値判断の規準」を基にして曲を聴き、感じたことや聴き取ったことを自分の言葉で語り合う、これを鑑賞活動における音楽科の言語活動と位置づけたい。音楽を聴いて最も情緒的かつ感情的に充実感を覚えるのは、「自分が感じたことや感動したこと、思い浮かんだことを他人へ話し、他者に認められ、評価され、その感情を共有して貰えた時」と言われる。つまり自分自身の感動体験を他者に理解して貰えた時に最も音楽を楽しく聴いていることになる。その土台となり、より多くの人々が心地よいと共通に感じる音楽の原体験へ、しっかり触れさせておく必要があろう。各人の個性を謳い好みの違いを強調する前に、皆が共通に良いと感じる音楽の普遍的な美しさや一般的な良さに浸らせ、体験を通じて感性として身に付けさせておくことがより重要である。

2.6 「音楽の定規」を基にして音楽表現を創り出す言語活動

音楽科における学びの一つは「音楽に関する知識と音響的実体とを関連付け、体験を通してそれを実感すること」だが、これを受けて音楽表現を創り出す場面での音楽科の言語活動を、音楽の諸要素を巧く組み合わせて自分の思いや意図、演奏表現などを言葉に置き換えて演奏仲間と共有・共通理解化し、言葉や会話、記述などを介在させてコミュニケーションを図る活動であると位置づけたい。具体的には、他者の演奏と自分自身の演奏（プロの演奏／自分たちの演奏、グループ同士の演奏）を聴いて自分なりに比較分析し、自らが目標とする音楽表現や自らが心地よいと感じる音楽表現とすり合わせてみたり、他の人の感じ方と比べてみたり、他の人へ自分の感じたことを説得したり、打ち合わせたりするような「言語を介在させた音楽に関するコミュニケーションの力」を育むことである。これについては岡田（2009）による次の趣旨の示唆が参考になる。

①「聴くこと」と「語り合うこと」とが一体になってこそ音楽の喜びは生まれる。

②「音楽を語る言葉を磨く」ことは十分努力によって可能になる（～略～）音楽の「語り方＝聴き方」には確かに方法論が存在する。

③純粋に非言語的な音楽体験は存在しない。

繰り返しになるが、音楽科における言語活動とは作文や国語力の涵養ではなく、多種多様な音楽に対して自分の「価値判断の規準」を基にして曲を聴き、自分なりに感じたことを自分の言葉で語り合う活動であり、そして演奏表現に関する打ち合わせ力や段取り力、説得力を育む活動である。その基盤となるのが、聴き取ったり感じ取ったりした音や音楽の変化や違いを自分自身の言葉で言い表す「音楽の言葉」であり、これを原体験として身に付けさせておくことが大切である。「いい言葉、いい言い回し」は湧き出たり閃いたりするものではなく、それまでに見聞きした言葉を思い出すものである。よって、教師が日常的に「音楽の言葉」をたくさん用いて語りかけておけば、児童・生徒はそれを模倣し真似することでより多くの「音楽の言葉」を積極的に使えるようになる。

3　科研費研究において実践協力者へ提案した鑑賞活動の位置づけ

3.1　鑑賞において音楽の諸要素を知覚する力

音楽の諸要素を学ぶには、それ以前に音楽の諸要素へ充分浸らせ無意識下で音を知覚させ音へ反応させる様々な原体験や前体験が行われていなければならない。本報告では、この「質の良いあそび」によって芽生えた知覚力を手がかりとして音楽の諸要素に気づかせ、感じ取らせて意識させるプロセス、つまり音響現象と音楽の諸要素を結び付けてその良さや働きを自覚させる再構成を活動の基盤と措定し、その学習段階を次の4つに設定した。

①他者や自身の演奏を聴いて要素に気付き、感じ取り、意識する段階。（要素を知覚し認知する力や、要素に気づき、聴き分ける力）

②他者や自身の演奏を聴いたり、練習前と練習後の演奏を聴き比べたりしてその良さや働きを自覚し、それを生かしたり際立たせたりする段階（要素を活用した表現や鑑賞を工夫する力）。

③要素同士の係わりや組み合わせによって生まれる効果や働き、要素の組み合わせで形づくられる音楽の仕組みを考える段階（全体の中で要素の働きや良さを考え、包括的に捉えて再構成する力）。

④気付き感じたことを自らの演奏へ結び付け、言語・非言語活動を活用して共有・共通理解へ高め演奏へフィードバックする段階（演奏者相互の説明力や説得力）。

ここで重要なのは、音や音楽の正体や仕組みを知っていてそれを自在に使いこなせる技術を持っていなければ、より高いレベルで「音楽する」ことには繋がらないということである。つまり演奏者は自らの思いや意図を具現化するために演奏上の工夫を試行錯誤し、聴取者はその工夫や試行錯誤を読み解き演奏者の思いや意図を予想し推察する。よって、より高い芸術性や情緒・情操の育成をめざす上では演奏者を育てることと鑑賞者を育てることは同義であり、可逆的かつ不可分な関係にある。

3.2　表現活動と鑑賞活動の一体化

表現とは制約の中で自己表現を工夫するものであり、鑑賞とは音や音楽に対する思考を伴った働き掛けである。表現上の違いを聴き取れるから演奏表現が幅広く豊かになり、表現技術や知識があるからこそ演奏上の変化や工夫を聴き取ることができる。よって「聴く（鑑賞）＝演奏（表現）」と措定した上で、児童･生徒へ「プロ演奏者は絶えずアイデアのある音を求めていること」ということを紹介した上で、「演奏すること＝聴くこと、音を出すこと＝感じとること」の意識化させることを求めた。ここで言う「アイデアのある音」とは次の3点を示している。

①音楽表現上の思いと意図を持って出す音。

②それを演奏者全員で共有しようとする音。

③思いや意図（メッセージ）を伝えようとする音。

そして、この「アイデア＝思いや意図（メッセージ性）」は、現実には音楽の諸要素（音の3要素：音色、音高、強弱、音楽の3要素：音の並べ方＝リズム、音の繋げ方＝旋律、音の重ね方＝和音）の組み合わせによる音響的な操作、つまり客観的かつ冷静な音の出し方の工夫によって創り出されるものであることを確認した。

このように演奏表現とは音楽の諸要素の組み合わせやその操作の工夫を楽しむものであり、鑑賞とは諸要素の組み合わせや操作の変化や工夫を感じ取り、その根拠を推理することを楽しむものであることを児童・生徒へ理解させる。その際に必要なのがセンサーのように音楽の諸要素に気付きそれを聴き取る感覚（知覚）と、プロセッサのように聴き取ったことを分析して音楽的嗜好を巡らせる思考であり、これを支えているのは音楽の諸要素に関する知識と、音楽の要素の組み合わせや操作を工夫する技術である。この意味からも「表現とは制約の中で自己表現を工夫するものであり、鑑賞とは音や音楽に対する思考を伴った働き掛け。表現上の違いを聴き取れるから演奏表現が幅広く豊かなり、表現技術や知識があるからこそ演奏上の変化や工夫を聴き取ることができる」ということを表現と鑑賞の両面から児童・生徒へ体感させ意識させることを望んでいる。つまり、音を出すことだけが表現活動ではなく、それ以前の楽譜と向き合う段階から既に表現活動は始まっており、音符の動きから音の動きを想像し、頭の中で響かせた音から音楽表現の変化を感じ取ることも表現活動の一部である。そして、出した音を聴く行為、頭の中で音を響かせながら楽譜を読み

解く行為の全てが鑑賞活動と結び付いている。

これに関連して、岡田（2009）による次の趣旨の示唆が参考になるので紹介しておきたい。

①「大多数の人にとって音楽を聴く最大の喜びは、他の人々と体験を共有し、心を通わせ合わせることにある」

②「聴き方を覚え、聴く型を身に付けることが音楽を聴く楽しみの幅を拡げる」

4　先行研究の整理とその概要

4.1 「きく」ことに関する先行研究の整理

「きく」という行為には「きき手」側の主体性の違いによって「聞く」と「聴く」の二種類があり、音楽の鑑賞においては後者の「聴く」をめざしていきたい。

①聞く：門の前で耳を欹てて家の中の様子を探る。

②聴く：耳に十四回心して、きくことに集中する。

この「聴く」ことについては、國安（2005）が主に2000年以降の「音楽と脳」に関する先行研究を整理しているので、その中から注目すべき点を紹介する。

①音楽の聴き取りは、脳全体の多数の領域が総合的に関連して処理している。

②音楽を集中して聴いている時、左半球の聴覚野は約25%多く反応している。

③家庭でよく音楽を聴いている子どもは、3歳上の子どもと同じ水準で脳の聴覚活動が活発である。

つまり音響情報を聴き取ることは神経結合の増加にも繋がることを示唆している。これを基に筆者は音響聴覚情報の聴取で活発になる側頭葉の感覚神経（聴覚神経）と、動作や呼吸などで活発になる運動神経が視床下部で同期することで脳全体が活性化することに着目し、受身的に音楽を聞くのではなく自らが演奏しているつもりになって音を狙いながら聴いたり、聴き取った音と体の動作を同期させたりしながら聴くことを、より効果的な鑑賞の活動方法の一つとして提案している。

4.2　音楽科における思考に関する先行研究の整理

音楽科における学びについて実践と結び付けて論考を深めたものとしては兼平（2009a、2009b）による研究が具体的であるため、以下これを参考にしながら整理してみたい。

①情動からアプローチした音楽科における思考

表現の背景として思考・技術・感情の結び付きが重要。思考はイメージや感情、技術とも結び付いて追求過程に働くもので、探求－選択－判断のプロセスに働く内的思考が音楽的思考であると措定している。また、生徒が学習活動の初めに抱いた抽象的なイメージを授業の中で音楽的諸要素に係わって発展させる思考の流れと措定し、音楽的思考を表現するために思いやイメージと音楽的諸要素が大きく係わり、音楽的思考は音楽授業において音を媒体として表現するときの「探求課程＝問題解決過程」に働くものと想定している。つまり情動に重きを置きつつ、その裏付けを音楽構成要素に求めていた。

②創る活動からアプローチした音楽科における思考

米国MMCPの「音楽的思考」やペインター＆アストンの「創造的音楽づくり」にもその片鱗が見られ、音楽的思考＝分析的思考・批判的思考・創造的思考と捉え、音楽的思考を基盤として生活の中で育ててきたイメージやアイデアを音や音楽の構成要素を使って音楽表現に結び付けるという学習活動を想定している。

③認知からアプローチした音楽科における思考

マルザーノらによる「21の思考スキル」を紹介した上で、岡本信一の見解である「批判的思考（音楽を評価するプロセス）と、創造的思考（概念・知識・構成要素の捉え方の組み替えや再構築に基づいて独創的な解釈・表現・パターンを創出し、その有効性や妥当性を検証するプロセス）を対峙させつつ、両者は循環しながら相互補足するもの」と結び付け論考を深めている。さらに田畑八郎による「音でイメージする能力、音で感奮する能力（情動喚起力）、音で認知・解釈する能力（演奏解釈力）、音で共に感じる能力（共感的理解力）、音で表現する能力（表現技能力）」を「音で思考するための基本能力（音を媒介として考える力）」という提案にも触れている。

④学力からアプローチした音楽科における思考

学校教育課程での「学力（思考･判断･表現）から音楽活動における思考を捉えたもので、感性を働かせて感じ取ったことを基にして思考・判断しそれを表現する一連の過程を大切にした学習活動と措定している。

筆者の見解として、この捉え方は、基礎的能力や理解力を身に付けることを通じて思考・判断・表現する力を育て、知覚し聴き取ったことと自ら表現したい思いや意図を試行錯誤によって関連付けることが音楽活動における思考であるとした学習指導要領にも繋がるものと考える。

5　本報告に関わる授業実践のポイント

5.1　鑑賞活動の位置づけとその捉え方

演奏や聴くという行為そのものが既に創造的な活動であることを押さえた上で、「鑑賞＝自らの音楽的･表現的要求と照合しながら能動的に聴く」ことを通じて、児童･生徒が次の4点を身に付けることを目標とした。

①聴き方の型やパターンを知る。

②作曲者の周到な作戦を推理する。

③聴く力、分析する力、想像し推理する力。

④試行錯誤された表現の変化や工夫を探る力。

つまり、鑑賞には思考の働き掛けが不可欠であるこ

とから、音の塊や羅列に音楽的意味や価値を付加し、感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを探り、それを感じ取ることができるようにさせること。そして裏づけや根拠を伴わない漠然とした詩的・物語的な聴き方は補助的な手段に止めて、音によるメッセージから様々なことを感じ取り想像することを体験させることを目標とした。

5.2 活動モデルの基本的なパターン

鏡に姿を映すように自分自身の演奏を客観的に聴き「気付く活動」と、模範演奏と自分達の演奏を聴き比べながら演奏表現を「磨き上げる活動」を一体化することで音楽の聴き方の習得をめざす。その際の「鏡」として録音・再生が可能なスピーカー一体型のICレコーダー（JVC社RD-R1）を用いた。さらに拙著の「鑑賞用評価シート[3)]」を配布または壁面教材として掲出し、鑑賞のみならず表現活動の意見交換の場面においても活用を試みて貰った。

活動モデルの大まかな流れは次のように設定した。

①課題として取り上げた部分の模範演奏を聴く。
②同じ部分を取り出して練習する。
③録音して、同じ部分の模範演奏と聴き比べる。
④何が違うか考えながら追求課題を探し出し練習する。
⑤再度録音して模範演奏と聴き比べ、自分達が設定した追求課題に対する練習の成果を話し合う。
⑥話し合いを基にして新たな課題を探し出し、さらに練習計画を考える。

なお、鑑賞活動とは耳にした曲を記憶することから始まるため、児童・生徒が最も親しみ馴染んでいる歌唱曲が教材として適切であると判断し、表現活動と一体化させることで一過性の鑑賞授業からの脱却を企図した。

5.3 授業実践を評価する4つの検証ポイント

実践の評価と検証のポイントを次の4点に措定した。

①子ども達自身の練習の深まりに対する「録音⇔確認」の声掛けのタイミングや方法、掛ける言葉の吟味。
②自分達の録音と模範演奏を聴き比べて、その違いを感じ取れない子ども達へのアプローチの方法。
③技術指導のタイミング、それを促す働き掛け方。
④演奏表現を深めるための教師による指導の度合い。

この検証で明らかにしたかったのは次の4点である。

①ICレコーダーは自らを映し出す鏡になり得るか？
②子ども達の試行錯誤と教師からの適切なアドバイスによって何がどこまでできるのか？
③教師はどのタイミングで、どのような働き掛けをするのが効果的なのか？
④どの学年の子ども達なら、何をどのくらい自分で気付くことができて、自分達で解決できるのか？

6 附属名古屋小学校・加藤幸子教諭による研究授業

本報告に関わって行われた研究授業の概要について、実践者から提供された報告、および筆者が撮影したビデオ記録と観察メモを整理して紹介しておきたい。

6.1 研究授業（2012年4〜5月実施）の概要

6.1.1 教材

①表現教材
「小さな世界」若谷和子作詞、シャーマン兄弟作曲
「ドレミの歌」ペギー葉山作詞、ロジャーズ作曲
「まほうのチャチャチャ」和田崇作作詞、ホリン作曲
②鑑賞教材
「メヌエット（アルルの女より）」ビゼー作曲

6.1.2 実践学年：小学校3年生、9時間完了

6.1.3 単元の目標

①音の重なりを感じて表現することに関心を持ち、進んで活動に取り組もうとする。（音楽への関心・意欲・態度）
②異なる旋律を重ねて歌ったり、楽器の音色を重ねて表現したりすることができる。（音楽表現の技能）
③音が重なることのよさを感じ取り、曲全体のよさや面白さを味わって聴くことができる。（鑑賞の能力）

6.2 指導上の工夫（筆者による要約）

附属名古屋小学校の全校テーマである「知識･技能、思考力、判断力、表現力を基盤として自己を磨く子どもの姿」に沿って、教科別テーマを「音楽活動に取り組むための基礎的な能力を身に付けたり高めたりするために、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを考えの基として、よりよい音楽活動に取り組もうと努める姿」と設定し、この具現化のために次のような工夫が考慮されていた。

①音楽の基礎能力を育むための「音楽あそび（附名小の伝統でもある）」と、表現活動の完成をめざす「トライアルタイム」を、毎時間、必ず授業の最初と後半にセットで行う。
②「音楽の遊び」の位置づけを次のように精選化した。
・単元設定した要素や仕組みの働きを捉え易い教材選択。
・本時の活動へ結び付けるために、楽しみながら無理なく取り組むことで達成感を味わうことのできる教材選択。
・各学年の発達段階に適した活動。
③本単元における「トライアルタイム」の骨子

ICレコーダー（JVC社RD-R1）を各グループ1台ずつ配置し、本単元で焦点化する音楽構成要素を「思考の基」として工夫を取り入れる表現の試行と、自分たちの演奏を録音して自分達の表現を試聴したり予め録音してあるプロ演奏家や教師の参考演奏を聴

き比べたりすることで、表現をより良いものにするための試行錯誤を繰り返させる。

④本単元で焦点化する音楽構成要素を強調した鑑賞教材を聴いたり、各グループに配置したICレコーダーを用いてグループ単位で自由に自分達の演奏を録音して試聴したりして、表現をより良いものにしたいという気持ちを持たせ、表現の試行錯誤を繰り返させる。

6.3　学習および活動の流れ（筆者による要約）

附属名古屋小学校音楽科では、単元構成、授業ともに「つかむ活動」「考えを持つ活動」「味わう活動」の3段階で構成している。その基本的な流れは次のとおり。

①［つかむ活動］音楽遊びや授業の導入を通じて、本単元や本時で焦点化する音楽構成要素（本実践は音の重なり）へ目を向け、気付き、問題意識を持つ。課題をつかむ。

②［考えを持つ活動］本単元や本時で焦点化する音楽構成要素（音の重なり）に着目しながら表現活動や鑑賞活動を繰り返し行うことで、表現に対する考えや「こうしたい」という思いや意図などを持つ。本単元や本時で焦点化する音楽構成要素を強調した曲（「メヌエット（アルルの女より）」）の鑑賞を通して、自分の考えや思いや意図をふり返る。クラス全体の中間発表会やグループ内の意見交換を通して他者の考えや思いや意図、気付きを知り、比較し合い認め合うことで自分の考えを見直したり再構築したりする。

③［味わう活動］活動のまとめを行って次時への見通しを持つ。再構築した自分の考えについて、思いや意図を生かして他の教材や活動に取り組むことで意識化できる。本単元で学習してきたことをふり返り、焦点化した音楽の諸要素の働きによる音楽の面白さ、良さ、美しさを味わう。

6.4　まとめ（筆者による要約）

自分たちの演奏録音を聴いたり、参考演奏を鑑賞して自分たちの表現と比較したりしながら、思い描いた表現にするためにグループ単位で活動に取り組めた。さらに、自分たちの演奏を冷静に判断しながら、よりよい表現を目指してグループ全員で話し合うこともできた。

7　本学附属学校で自主的に行われた授業実践の報告

以下、本報告に関わって本学附属学校で自主的に行われた授業実践について、各実践者から提供された報告を紹介しておきたい。（一部、筆者により要約）

7.1　附属名古屋小学校・吉松頼美による実践報告

7.1.1　授業実践（2011年10～11月実施）のねらい

音楽の授業において、様々な音楽の活動に取り組むとき、児童がより活発に心を働かせながら活動に取り組むことができれば、より豊かな心の働きをもつことができるようになると考える。よりよく音楽の活動に取り組むことができるような授業を行うことが大切であると考えた。

7.1.2　授業実践の内容

本校では、一単元を通して共通した音楽を特徴づけている要素や音楽の仕組みに着目させながら、表現の活動と鑑賞の活動を関わらせて授業を行ってきた。授業の導入では、あそびうたや既習曲などを扱い、単元で扱う要素や仕組みに着目させやすく、本時の活動への意欲付けとなる「音楽遊び」に取り組ませてきた。それにより、要素や仕組みを「考えの基」として音楽活動に取り組むことができるようになってきた。そこで本単元で扱う要素や仕組みを「考えの基」として、自らの思いや意図を明確にして、表現を高めるために試行を繰り返す活動に取り組ませるための指導方法を工夫した。以下、5年生の単元「音の重なりを感じて、豊かに表現しよう」主教材：「君をのせて（宮崎駿作詞、久石譲作曲）」における活動の様子を述べる。

10名程度のグループを編成し、2部合唱に取り組ませた。まず、活動に取り組む前に、要素や仕組みを考えの基とし、感性に基づいた「表現の完成型」を思い描かせた。そして、完成型に近づかせるために必要な表現の工夫を考えさせ、活動の視点とさせた。その後、表現を高める活動に取り組ませ、活動の視点に基づいて自主的な表現活動に取り組ませた。その中で、各グループに配置したICレコーダーを用いて、自分たちの表現を録音したものを聴いたり、自分の表現を模範演奏と比較したりした。そして、思い描いたことが歌声を通して表現することができているかどうか、自分の表現を客観的に判断しながら表現の試行を繰り返していくことでよりよい表現を追求した。

7.1.3　まとめ

「君をのせて」の表現に対する思いや意図を「表現の完成型」としてホワイトボードに書くことで思いや意図が明確になり、活動が停滞することなく自主的に取り組み続けることができた。また、録音した演奏を聴いたり参考演奏と比較したりすることで、「ここの部分のアルトが強すぎる」「曲の山場をもっとつくりたい」などの発言のとおり、自分たちの演奏を客観的に分析し、よりよい表現を目指して話し合いをすることができたと考える。

7.2　附属名古屋小学校・加藤幸子による実践報告

7.2.1　授業実践（2011年10～11月実施）のねらい

本校では、表現の活動と鑑賞の活動を一単元の中で関わらせながら、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みに着目させた指導を行い、児童にその働きを捉えさせながら表現したり鑑賞させたりすることで、音

楽の面白さやよさ、美しさを感じ取らせ、表現に対する考えをもたせるための研究を行ってきた。その結果、要素や仕組みの働きを捉え、音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ることができるようになり、表現に対する考えを深めることができるようになった。今後、要素や仕組みを「考えの基」として、主体的に自分の目指す表現をよりよいものにしようと試行錯誤し、豊かな表現を追求することができるようになってほしいと考えながら、本実践を進めた。

7.2.2 授業実践の内容と授業の様子

本実践では、自分たちの表現を客観的にとらえる活動に取り組ませる場を設定し、その成果を検証した。自分たちの表現を録音したものや、演奏家などの参考演奏を比較させることで、子ども達は、進んで自らの表現を自己分析したり、改善点を考えたりしながら、よりよい表現を目指して試行を繰り返すことができると考えた。以下に、2年生で行った単元「反復の音楽で様子や気持ちを表現しよう（9時間完了）」（主教材：「汽車は走る（岡本敏明作詞・作曲）」の実践の様子を述べる。

①「反復」の仕組みに着目させて「汽車は走る」の歌唱奏の活動に6～7人のグループで取り組ませた。表現を工夫させる際に、「国際急行列車」の鑑賞の活動で、感じ取った音色の働きの面白さやよさを想起させながら、どのような表現にしていきたいかを思い描かせた。以下、子どもの発言を記しておく。

「1回目は、出発して徐々にスピードをあげていく様子を表すために、速度を少しずつ速くしていくよ」

「2回目は、元気に走る様子を表すために、1回目よりも強弱を強くするよ」

②その後、思い描いた表現を目指していかせた。自分たちで考えた工夫を取り入れながら表現を試行し、各グループに配置したICレコーダーで録音した自分たちの表現を聴き、表現について話し合った後、再び試行させた。

「1回目はもっと速度を遅くしたらどうかな。出発の雰囲気が出ると思うよ」

「もっとみんなの音を合わせたいね。音をよく聴いて、速度をそろえようよ」

③再び「汽車は走る」の参考演奏を鑑賞し、自分たちの表現と比較させ、自分たちの表現をさらに客観的にとらえさせ、表現について話し合った。

「参考演奏は、1回目と2回目の反復の違いがぼくたちの表現より、はっきりしているね」

「2回目と3回目の違いをもっとはっきり出したいね。もっと強弱を弱くしようよ」

④次に中間発表会を行い、自分の表現と友達の表現の類似点や相違点を意識することで、自分の表現を見直させた。その後、再び表現を試行し、表現の完成を目指させた。

「汽車の走る様子が想像できるね。反復のさせ方が色々違うね」

「3回目と4回目の強弱と速度の違いがおもしろいね。ぼくたちとは違うね」

7.2.3 まとめ

思い描いた表現にするために、反復のさせ方に強弱や速度の工夫を取り入れながらグループ活動に取り組むことができた。そして自分たちの演奏を録音したものを聴いたり、参考演奏を鑑賞し自分たちの表現と比較したりして、自分たちの表現を客観的に判断しながら、よりよい表現を目指してグループで話し合い、表現の試行を繰り返すことで自分たちの表現を自己分析したり改善点を追求できた。

7.3 附属岡崎小学校、太田理恵による実践報告

7.3.1 授業実践（2011年10～11月実施）のねらい

卓上ハンドベル（幹音5音）を用いた創作活動を行うなかで、子ども達が互いの表現を音楽の要素に着目し構造的に聴取することで、自分の表現の幅を拡げることができるよう、次のような教師支援を講じた。

①一人一人の子どもが用いた音楽の要素を把握し、グループ分けをすることで、互いの表現を高める意図的な係わり合いの場を設定する。

②今まで創ってきた表現と今の表現を比較することで、自分の表現の幅の拡がりや深まりを自覚する場を設定する。

③先の①では、児童が音で係わりあい、互いの表現を高め合うことができるよう、授業前に行う支援、授業中に行う支援、授業後に行う支援の3つを講じた。

7.3.2 授業実践の内容と授業の様子

①一人一人の児童が用いた音楽の要素を把握し、グループ分けをすることで、互いの表現を高める意図的な係わり合いの場を設定する。

【授業前に行う支援：児童の活動を支える記譜と対話】

一人一人の児童の表現について教師が対話をしながら記譜をする支援を試みたところ、児童の意識のゆれや変化を把握できた。そのために一人一人の作品に対する願いを明確に持ちながら授業を行うことで、児童の意見と表現を教師が繋げることができた。また対話の際に児童の表現のよさを「このタッカのリズムがすてきだね」など音楽の要素を用いて価値づけたことで、自分の表現に自信をもち、誰かに演奏を聴いてほしいという思いへと高まった。

【授業前の支援：表現を音楽の要素で分類した活動】

教師から示すのではなく、気づかせたい要素を用いたグループで発表会を行ったことで、「おたがい意見を出しあって協力して」という気持ちで最後まで追求活動を行うことができた。以下に子ども達の感想を一部紹介する。

「楽しかった。なぜかというと、おたがい意見を出し

あって協力してつくったおもいでハーモニーです。ことばを（音で）入れてみたりしました」

「今までつくったハーモニーは簡単で、むずかしいのをつくってみようと思っても簡単のしかつくれなかった」

「最初はなんとなくつくっていたけど、友達の『おもいでハーモニー』をきいて本当の気持ちを音にしないと『おもいでハーモニー』じゃないと気がついた。友達がいたからすてきなおもいでハーモニーがつくれたと思う」

②今まで創ってきた表現と現在の表現を比較することで、自分の表現の幅の拡がりや深まりを自覚する場を設定する学級発表会を終えた後、最初の作品と今の作品を演奏し比べる活動を行った。そうすることで自分の作品を客観的に比較し、表現の高まりを自覚することができた。

「ぼくのおもいでハーモニーは、最初の方は前の方がいいんだけど、最後は前のおもいでハーモニーだと、あんまり人がいない感じがするから、最初は前の方がいいんだけど、後からはやっぱ今のがいいから、前のハーモニーと今のハーモニーの合体版を作りたいと思った」

このように、自分の作品を振り返ることで、自分の表現の拡がりを自覚し、成長を実感することができるため、追求活動をこれからの生活への自信や次への活動意欲につなげるのに有効な支援だったと考える。

7.3.3　まとめ

「音で係わりあい、表現を高め合う」魅力的な姿を引き出すために、授業の前、授業の中、そして授業後の3段階の支援を講じたことで、一人一人の追求を把握し、意図的に係わり合う場を設定することができた。自らの創作活動を振り返らせたことで「作品がこんなに成長した」と自身の表現の高まりを実感させることができた。

7.4　附属名古屋中学校・石川翼による実践報告

7.4.1　授業実践（2011年11～12月実施）のねらい

本校では、目指す生徒の姿を「音楽を聴き感じ取る力を高め、表現を構築することができる子ども」と設定し、研究を進めている。本校が考える「音楽を聴き感じ取る」とは、音楽の要素や構造の働きによって生み出される曲想を基に、他者が表現しようとしている意図を明確にすることであり、「表現を構築する」とは他者が表現しようとしている意図を踏まえながら、自分がどのような表現をしていきたいのかということを、音楽の要素や構造の働きに着目して明確にすることである。目指す生徒の姿を実現するためには、音楽を聴き感じ取る力と表現を構築する力を育んでいく必要があると考え、実践に取り組んでいる。

7.4.2　授業実践の内容

中学校3年生の実践「伝えよう！私たちの合唱」（『INTERRA PAX　～地に平和を～』）

声部の役割と全体の響きを理解し、表現を構築する力を高めるために、これまでに学習した音楽の要素や構造の働きを生かして表現を構築させるとともに、ICレコーダーに録音した演奏を振り返りの材料とさせたり、視覚的資料として、楽譜に旋律の動きや音の重なりを図形で示したスライドを提示したりすることを手立てとして講じた。

【表現をつかむ場】曲の全体や一部分を音楽の要素や構造の働き、曲想の変化に着目して聴かせた。生徒は「音の重なり方が特徴的であること」や、「一番印象に残る部分が曲の初めと終わりに繰り返されている曲の構成」、さらに転調によって、神秘的な感じや輝かしく力強い感じが表現されていることに気づくことができた。

【表現を構築する場】各パートにICレコーダーを配置し、練習を録音して伝え合いの材料として活用させた。音取りに重点が置かれてしまい、伝え合いは十分にできなかったが、ソプラノでは自分たちの演奏を録音して各自が楽譜に気付いたことを記入する姿が見られた。学習プリントの工夫によって「スラーやブレスの位置に注意して滑らかな旋律を生かす」「輪唱のようになるところで他のパートとの重なりに注意する」といった課題を設定することのできることを確認した。

【表現を振り返る場】課題が達成できているかどうかを振り返らせるために、自分たちの合唱を録音したものを基に、より課題に合った表現とするにはどうしたらよいのかを話し合わせた。各パート2～3名ずつの生徒で構成されたグループでの話し合いでは、ICレコーダーへ録音した自分たちの演奏を繰り返し聴いたり、模範演奏と聴き比べたり、グループで演奏を録音し聴いたりする姿が見られた。学級全体の話し合いでは、生徒から出された意見を教師が実際に演奏して聴き比べさせたり、図形楽譜を示したりして補足した。その後のグループ練習では模範演奏と自分たちの演奏を聴き比べることでもう一度確認したり、演奏を何度か録音したりする様子が見られた。

7.4.3　まとめ

生徒は範唱との聴き比べを何度も行ったり、他パートの範唱を聴きながら自分のパートの音を確認したりと、予想以上にICレコーダーを活用していた。音楽を苦手とする生徒がICレコーダーに耳を付け何度も確認して「ここのリズムと重なりがよく分からない」とグループ内で語る姿が見られたのはその成果を表している。今後は本実践で得られた成果をもとに、合唱以外の活動でも音楽を聴き感じ取る力と表現を構築する力を育んでいきたい。

7.5 附属名古屋中学校・井垣智恵による実践報告

7.5.1 授業実践（2011年11～12月実施）の概要

①単元の目標「聴き感じ取る力を高め、表現を構築する力を育む音楽科の授業」

②単元名:日本の音楽に親しもう「六段の調」「さくらさくら」（1年生、5時間完了）

③単元のねらい

鑑賞活動では、独自の奏法による音色や日本独自の調子である平調子、速度の変化などの音楽の要素や構造の働きから生み出される曲想に気付かせ、聴き感じ取る力を育んでいく。表現活動では、実際に箏を演奏することで「表現を構築する力」も育んでいく。

④単元の指導

【表現をつかむ場】DVDで箏曲「六段の調」の演奏を鑑賞させ、「ひきいろ」や「割り爪」などの奏法を視覚的に見せることで、奏法による音色の変化を捉えさせる。また、音楽の要素や構造の働き、曲想の変化に着目して聴かせ、学級全体での意見交換を行う。

【表現を構築する場】課題を「日本らしく『さくらさくら』を演奏しよう」と設定した上で「さくらさくら」を箏で演奏させ、「音色」や「速度」や「強弱」を工夫した範奏を聴かせた上で「より日本らしくするためには、どんなところに気を付ければよいのか」と問いかける。そして範奏を参考に自らの演奏を振り返り個人の課題を設定させ、練習では設定した課題を意識させる。練習は各グループで行わせ、互いの演奏を聴き合い基本の奏法や個人の課題が達成できているかどうかを伝え合いながら練習を進めさせる。

【表現を振り返る場】発表会を行って演奏を聴き合い、課題を達成することができたかどうかを振り返らせる。

7.5.2 授業の様子

【表現をつかむ場】映像で箏曲「六段の調」を鑑賞することで、箏独自の奏法に気づき、そこから生み出される音色の変化に気づくことができた。また、曲の初めの部分では、ゆったりとした速度から生み出される「間」から落ち着いた雰囲気や「和」の感じを聴き感じ取ることができた。

【表現を構築する場】教師による範奏を2回聴かせた。1回目は、基本的な運指と姿勢が概ね理解できたと判断した時点で、指を立てて弦を力強くはじいた演奏と、指を寝かせて優しくなでるような演奏を聴き比べさせた。2つの演奏を聴き比べ、多くの生徒は、指を立てて力強くはじいた演奏の方が箏らしい音色がすると判断し、「指づかいで音色が変わるので、指づかいに気を付ける」という課題を記していた。2回目は、響きのある音色が出せるようになってきたと判断した時点で、曲の終わりの部分の速度をさらに緩めてだんだん弱くする演奏を聴かせた。ある生徒は、「一つの音を弾いてから一息おくくらいで演奏すると、ゆったりして日本らしい感じが出るので、ゆったりした速度に気を付けて演奏する」という課題を記していた。

7.5.3 まとめ

実際に演奏している映像を鑑賞することで、生徒は奏法による音色の変化や余韻に気づき、曲想を聴き感じ取ることができた。また、全体の課題である「日本らしい『さくらさくら』を演奏しよう」を達成するために、範奏を参考に音色や速度、強弱を意識した課題を設定することができた。しかし少ない時間数の中でよりよい表現をさせるために、課題が達成できたかどうかを振り返り、表現がさらに高まるように他者の意見や範奏を参考にして課題を修正する活動場面を確保することがなかなか難しい。

おわりに

本報告では科研費研究の主たる目的である事例収集に向けて、本学附属学校で実践して頂いた研究授業と自主実践の概要を整理して紹介した。今後は一般校にも連携を拡げてより広い範囲で事例収集を行いたい。また、演奏とは単に音符を音へ置き換える作業ではなく、自分の音楽的表現要求というフィルターを通しながら楽譜を音楽へと再変換することである。鑑賞とは漠然と音を耳にしているのではなく、自分の嗜好に合った音楽表現を求めて自らの音楽的要求と照らし合わせて聴くことで、心の中に情動が沸き起こっている。つまり演奏や聴くという行為そのものが、既に創造的な活動を行っていることになる。今後はこの視点からさらに分析を深めていきたい。

［注］

1） 本研究は科学研究費補助金「基盤研究（C）23531248、研究代表：新山王政和」を受けて行っている。

2） 拙著『改訂版・新しい視点で音楽科授業を創る！』、スタイルノート、2011、p. 92の下から5行上

3） 前掲書2)、p. 138に示した「鑑賞用評価シート」

［参考文献（副題省略）］

新山王政和・矢崎佑2013「表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした実践」、『愛知教育大学研究報告第62輯』

岡田暁生2009『音楽の聴き方』、中公新書

國安愛子2005『情動と音楽』、音楽之友社

兼平佳枝2009a「思考力育成からみた中学校創作授業の現状と課題」、『北海道教育大学紀要教育科学編59』

兼平佳枝2009b「日本の学校音楽教育における音楽的思考の展開過程」、『北海道教育大学紀要教育科学編60』